
tatara

ノブナガ・o

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

t a t a r a

【Zコード】

N5713F

【作者名】

ノブナガ・〇

【あらすじ】

文明の滅んだ日本。国王の下に4人の王が。

はじめ（前書き）

BASAを作者風にアレンジしてみました。
元を知ってる方も知らない方も是非ご一読ください。

はじまり

それは、近代文明が滅び戦国の世となつた日本。

西の砂漠の地。

その地に双子の子供が生まれたのは十二年前。その兄タタラは預言者ナギに運命の子と称される。もう一人の子妹更紗。

「こら、更紗。砂漠へいってはいかん。」御守りの角じいが更紗を追いかける。

「もう、だつて、砂漠の先に何があるか知りたいんだもん。」角じいの制止をうざつたそうに振り向く更紗。

「砂漠の先になぞ、なんにもありません。」そういうて、逃げられないよう、更紗を小脇に抱える。

「痛つ。」そんな角じいに砂を投げつける更紗。

「こらこら。そんなことしてはいけませんよ。」やさしげに諭すその人は、預言者ナギ。盲目でありながらすべてをみとおし、医者でもある。この人こそ、更紗の兄・タタラを運命の子と称したのだ。

「はーい。」角じいのときとは違い、えらく素直な更紗。

「さあ、帰りますよ。」ナギにそういわれ、村へ帰つてゆく。

「全く、あんたがいろいろと知恵をつけさせるから。」ぼやく角じいに微笑むナギ。

「知識があおいことは悪いことではありませんよ。それにあの娘、今日は村にいづらいのでしょうか。」

そう、今日はタタラの十二の誕生日。元服の日なのだ。

元服の儀式では、村に代々伝わる、宝刀・白虎がタタラに渡される。双子の妹である更紗も当然誕生日なのだが、あくまで脇役。祝つてもらえるかも定かではない。なにより大好きな兄が更に遠くへいつてしまいそうで、更紗は不安だった。

儀式の夜。

預言者ナギが厳かな声で宝刀をタタラに渡す。

「この日を持つて長の長子タタラを成人とみなし、村の守護刀・白虎をつかわす。」歓声がおき、村中が一人の子供の将来に期待する。この乱れた世を、変えてくれる運命の子に。

皆がタタラを囲んでいる。更紗は気付かれないようひたすら一つと白虎に触れようとする。

だが、その瞬間父に頬を殴られた。

「馬鹿者。これは村の守護刀。女が触れてよいものではない。」更紗は痛さと、辛さで走り出してしまった。

タタラは運命の少年。じゃあ私は？

砂漠の夜は寒かった。孤独な更紗にはなおさらだ。方向もをわからぬままさまよう更紗。

「砂漠で迷つたら星を見なさい。」ナギの言葉をおもいだし、夜空を見あげる。（でも、どれがどれだかわからな）よ。（さまよう更紗の視界に赤い光が見えた。

（なんだろう。きれい。）みどれる（ひに）その光は増えてゆく。ひきこまれるように歩く更紗。

「いかん。更紗そつちにいつてはいかん。」角じいの声を聞き、逃げるようにして光に近づく更紗。その赤い光は軍隊であった。赤い鎧の軍隊。即ち、赤の王の軍である。

「無礼者。赤の王の軍を横切るとは。」そうこつて更紗を斬りつけようとするのを角じいが必死になつてかばう。

「お許しき。何も知らぬ子供ゆえ、どうかお許しを。」兵が容赦なく角じいをきりつける。背中が血で赤く染まってゆく。

「やめて、やめてよ角じい。」私なんかのためにやめてよ。私はただの子供なんだから。

「やめよ、赤の王。名に傷がつくぞ。」青の衣装に身を包むその男に振り向き、刀を一閃する。

青の衣装の男の左目から血が滴り落ちる。

「その左目に免じて許してやる。」赤の王はさう言つて軍を退けた。

「ありがとうございます。あのお名前は？」

「揚羽。」そういうと揚羽は去ってしまった。

その夜。村は赤の軍に襲われ、タタラの身代わりとして幼馴染の男の子が赤の軍に殺された。

あれから三年

再び赤の王が攻めてきた。

「タタラの首と、宝刀白虎をさしだせ。今度は偽者ではすませんぞ。」

「赤の軍が村人を次々と殺してゆく。」

「ナギ、どうしよう。」

「隠れていなさい更紗。女、子供とて容赦しない連中です。」

「タタラは？」

「地下に隠れているでしょう。」そういつた矢先に・・・

更紗の眼は信じられないものを捕えていた。

「タタラの首、獲つたぞ。」

赤の兵が掲げているものは間違いなく兄タタラの首であつた。それを見た村人は生きる気力を失つたかのようにその場で崩れおちた。

「いかん。、皆逃げるのだ。逃げて生き延びるのだ。」しかし、角じいの必死の叫びももはや村人には届いていないようだつた。

（いけない。皆逃げて。）更紗はそう思つても広場に飛び出すことはできなかつた。

「逃げよ、逃げるのだ。」角じいが叫ぶ。

「もういいのです。タタラ様がいなくては・・・」

（私がいなきときは村の人たちを頼むよ。）兄タタラの言葉を思い出す。

（お兄ちゃん。わかつたよ。）更紗は泣きながら己の髪を切つていた。長く伸ばした三つ編みをきり、兄と同じ髪型にする。

「更紗。あなたはここにいなさい。私は村人を説得してきます。」

「いいえ、ナギ。私が行きます。」そういつて更紗は飛び出した。広場では赤の兵が逃げることもできない村人を楽しむかのようにきりつけていた。村人はただただ、タタラの名をよぶだけで。

「死ぬことは許さない。殺されたのは妹の更紗。赤の王の死に目をみたい奴はみな生き延びよ。」更紗はそう叫ぶと兄の馬・夜刀にのり敵中に突っ込んだ。

夜刀はタタラ以外乗せない氣の強い馬だった。それ故、更紗は必死に夜刀の背にしがみついていた。

夜刀は降りしきる矢の雨を難なくかわし敵中に踊りこむ。

（私、こんなに上手く馬に乗れたか？いや、私が乗ってるのではない。お兄ちゃんが乗せてくれてるんだ。）

更紗はそう思いながら、夜刀の背にしがみついていた。もうすぐ、角じいたちが岩山を爆破してくれる。そうすれば、その隙に逃げられる。夜刀はそのことが分かっているかのように、赤の軍を翻弄し続けた。

「赤の王、タタラです。タタラが生きています。」部下が驚いて声を上げる。

当然だ。タタラの首を獲ったのは、赤の軍でも猛将としられる銚山將軍だったのだ。銚山將軍は数々の戦で功を上げ、赤の王の信頼も高い。その銚山將軍がタタラの首を獲つたといふのに、タタラが赤の軍に突撃してくるのだ。

「タタラには双子の妹がいると聞きます。銚山將軍、間違つて女の首を獲つたのでは？」共に出陣していた文官が銚山をからかう。銚山がその文官を睨むが文官はものともしない。

「退け、退けー。」突如、赤の王が命を下す。

「しかし、まだタタラが。」部下が反論する。

「目の前のタタラが本物かどうか知らんが、時を稼いでいるのは明白だ。急ぎ、後退せよ。」

そのとき、爆音と共に岩山が崩れ落ちてきた。赤の王の命が少しでも遅ければ、爆発に巻き込まれていただろう。

「危なかつたですな。」文官が爆破の後を見て、胸をなでおろす。

「しかし、タタラの首の真偽はいかが致します。」

それを聞き、タタラを討ち取った張本人である銚山が眉をしかめる。

「タタラの首を灯台の砦にさらす。」

「？」銚山が困惑する。赤の王の意図が分からぬようだ。
「なるほど、タタラが生きていれば取り戻しにくるということですか。」文官が頷く。

「灯台でタタラを討つ。ついでに白虎の刀も首と共に持つておけ。」

「赤の王の命の下、タタラの首はさらされた。」

白虎の村人たちは、更紗の活躍もあってか無事に生き延びることができた。

「タタラ、よくやりましたね。」更紗ではなく、タタラと呼ぶナギ。もはや、更紗であつてはならないのだ。白虎のそして、国王の悪政に苦しむ民の希望として、運命の子タタラでなくてはならないのだ。数日後、タタラの元に灯台の砦にタタラの首がさらされていることがしらされた。それを教えたのは、以前更紗を援けてくれた揚羽であつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5713f/>

tatara

2010年10月15日21時26分発行